

# アクティブ・ラーニングを目指して

兵庫県立大学環境人間学部准教授 竹内 和雄

## 1. はじめに

兵庫県立大学環境人間学部の竹内和雄です。今回は、私がふだん、講義で工夫していること等を紹介させていただきます。私は中学校国語科、英語科教員としての20年間勤務経験がありますが、大学教員としてはまだ5年目で、素人の域を脱していません。私のまわりの先生方は、アカデミックなハイレベルな講義をされておられますが、私にはまだできません。これまでの経験を総動員して、諸先生方に少しでも追いつきたいと5年間、模索してきました。私なりの途中経過として、現代教育論（2年時配当）での工夫を中心に記載します。

この講義を組み立てるときに重視したのは、「アクティブラーニング」「グループワーク」「調査研究発表」の3点でした。学生自身が問題設定し、グループで調査研究。それをできるだけわかりやすく発表させることにしました。特に、「できるだけグループで協力する」「他のグループの発表から刺激を受けさせる」ことに重点を置きました。

## 2. 講義の実際

### 1) アイスブレイクからグループ分け

講義の中で細心の注意を払ったのは、雰囲気作りです。この講義は後期の1時間目開講で、寒い冬の朝です。学生たちは凍えそうな感じなので、アイスブレイクに力を入れました。

この講義では、「ハイタッチ<sup>1</sup>」「ひたすらジャンケン<sup>2</sup>」等、雰囲気を和ませるものと、「積み木自己紹介<sup>3</sup>」等の集団の凝縮性を高めるものを組み合わせて実施しました。アイスブレイクの内容によって、学生の取り組む姿勢が目に見えて変化することがわかってきたので、今後の工夫が必要と思っています。アイスブレイクの流れで、6人弱のグループを結成します。ふだんは4人程度のグループ構成でやることが多いのですが、この授業では、調査が力点の1つなので、調べ物と発表の内容を考え、6人班にしています。

講義のさまざまなこと（出席管理やコメントカード回収等）を班単位で実施し、班長に

<sup>1</sup> 5人程度の人とハイタッチをする。その際、できるだけ大きな声で「イエーイ」等の声を出す。

<sup>2</sup> 3人に勝つまでジャンケンをし続ける。3人に負けるまで、3人と「あいこ」等のバリエーションもある。

<sup>3</sup> 「蜜柑が好きな竹内です」と一人が言うと、隣は「蜜柑が好きな竹内の隣の、林檎が好きな山本です」。さらに「蜜柑が好きな竹内の隣の、林檎が好きな山本の隣の、豆腐が好きな鈴木です」のように、自己紹介を積み木のように重ねていく。構成員全員一周できれば終了。途中で間違えると、その人から再度開始。

責任を持たせています。班単位での授業構成は予想以上に効果的なことがわかってきたので、今後も取り入れていくつもりです。

## 2) 調査研究テーマ決定

### ①自分たちで内容決定（KJ法的なワークショップ）

学生たちの意欲を高めるためのキーワードの1つは、「自己決定」だと思っています。本学の学生たちは真面目なので、教員が決めたテーマでも、わりと意欲的に取り組みますが、自分たちで決めたテーマを自分たちで調査研究するとより意欲的に活動することがわかってきました。そのため、テーマ決定にじっくりと時間を取るようにしています。2年生配当で、教員を目指していない学生も多数いるので、まず教員が「現代教育の現状と課題」を丁寧に講義します。その後、各自の問題意識を書かせます。ここで学生たちがどんなことを書くかが授業の成否の鍵です。学生が書いたものを次時に紹介しますが、教員の講義以上に、仲間の声に刺激を受ける学生が多いです。

その後、各班で付箋を使って、テーマ決定の話し合いをします。班員それぞれが自分が興味のある教育課題を付箋に10個程度書きだし、模造紙に貼っていきます。それを班員は認で5～6個のカテゴリー分けし、最終的には、自分たちが取り組むテーマを決定します。決定したテーマを各班は全体に発表します。発表内容は全員で相互評価させ、教員も良いところを見つけて褒めるようにしています。他の班から最も良い評価を受けた班には、簡単な賞状伝達する等、次への動機付けのための工夫をしています。

## 3) 調査研究

### ①2回の発表

自分たちで決めた課題について、各班で調査研究し、発表させます。2回の発表に取り組みさせますが、1回目は、講義受講者対象のアンケート調査を必須にし、アンケート分析と発表の雰囲気をつまませます。1回目ですべてのアンケート調査を完了させ、2回目にそれぞれが改善しながら調査を進めます。

### ②2回目の発表での追加要求

2回目の発表では、調査対象を受講生内から受講者外にも広げさせます。これまでは学内の友達等に応える場合が多かったのですが、最近はSNS等の普及もあり、ネット調査をする学生も増えています。また、「現代教育」を大きなテーマにしているため、児童生徒、教員や教育委員会等への聞き取り等を希望する学生もいるので、そういう場合は、教員のネットワークの中で対応しています。

また1回目の発表がパワーポイントを使った発表に終始するケースが多いので、写真や動画等を使ったものにするようにさせています。今時の学生たちなので、効果をすぐに理解して良いものになります。言葉の使い方や聴衆を巻き込んだプレゼン方法等も提案することで、より質の高いものになることも多いです。さらに、2回目は文献等を参考にさせ、より学術的なものを意識させます。

### 3. より良い調査研究にするために

#### 1) 評価方法

学生同士に相互評価させることに力を入れました。「調査内容」「発表の工夫」等で評価させます。全員で集計し、最も得点の多い班を全員で褒め称えます。

さらに、教員がそれぞれの班の良い点（調査内容、発表の工夫等）を全体に説明します。この行程が実は非常に重要で、これがないと学生たちは、パワーポイントのアニメーション等の工夫に終始してしまいます。

#### 2) 活動場所の確保

それぞれの活動をするのに適した環境を用意することに教員として腐心しています。そのため、活動は「大講義室」「机が移動できる教室」「パソコンが使用できる教室」の3つの教室で行います。教員が全体に教えるときは、大きなスクリーンと音響システムが完備した「大講義室」、グループワークをするときは机を移動させることができる「机が移動できる教室」、学生たちがパワーポイント作成や動画編集のため、パソコン使用を必要とすることが予想されるときは「パソコンが使用できる教室」を確保しておきます。



#### 3) PDCAサイクル

3回の発表で、学生たちにはそれぞれ自分たちの発表について反省させます。それを次の発表に活かすように仕向けています。いわゆる「PDCAサイクル」を意識させることです。学生たちは、他の班の良い発表を見て、自分たちの班の発表の反省をして、より良い発表を組み立てていきます。

### 4. 課題と展望

現代教育論も5年目が終わろうとしているので、最初の講義からはだいぶ改善されてきたが、まだまだ課題が多いのが実情です。以下、課題と展望を記載します。

#### 1) 学術的なフィードバック

2年生配当で、しかも教職を目指さない受講生が多いので、専門知識が乏しい学生が多い。そのため、より学術的なフィードバックが必要ですが、時間の関係もあり、なかなかうまくいきません。毎年、8班程度が発表し、それぞれが自分でテーマ設定するので、教員の明るい分野ばかりでないで、このあたりが難しいところです。わたしなりに精一杯対応していますが、どうしても場当たり的になってしまうこともあります。例えば数年前に「給食」をテーマに調べた班は、メニューと調理方法を中心に調べましたが、今年のあ

る班は調べていくうちに、最終的に「給食費未納問題」に行き着きました。学生たちと調整しながら講義を組み立てていますが、結果的に発表当日にそのあたりについて学生から質問があり、十分な対応ができず、反省しきりでした。

## 2) 90分×15回、しかない

オリエンテーションを含めて15回しか講義がないので、時間との闘いになります。

「アクティブラーニング」を目指して授業を15回で完結させるのは、難しいです。学生自身の問題意識を大切にしたいグループが目標ですが、どうしても教員からの提示が増えてしまいます。また、アイスブレイクの重要性は前述の通りですが、90分の授業の中で最初の10分程度を使ってしまうため、講義最後のまとめの時間が取りにくくなることが多い。このあたりも課題です。

## 3) 質の高い発表

とはいえ、学生たちの発表は年々、質が高くなっています。先輩の発表を見ていることが刺激になっていると思います。全体的な傾向としては、当初は、パワーポイントを使った文字中心の発表が多かったのですが、だんだんと写真等の画像になり、さらに動画と進んでいます。学生たちのスマホ等でそういうものに慣れてきたことも多いと思います。発表でより動的なものが聴衆を引きつけることに気づきだしたことも大きいと感じています。

さらに、最近は、パワーポイント自体使わず、紙芝居や寸劇等、リアルタイムでの発表が増えてきていますが、そういう発表に対して、「時代に逆行しているようで、実はとても新しい感じがする」と多くの学生が高く評価しています。この講義の一つの成果だと感じています。

## 5. おわりに

以上、現代教育論での工夫を材料に、私なりに講義について記載してみました。成果よりも課題が大きいのが実情ですが、皆様の反面教師程度にはなるかなと願っています。

### 竹内 和雄先生（兵庫県立大学環境人間学部准教授）

兵庫県立大学環境人間学部准教授。公立中学校で20年生徒指導主事等を担当（途中、小学校兼務）。市教委指導主事を経て2012年より現職。生徒指導を専門とし、いじめ、不登校、ネット問題等、「困っている子ども」への対応方法について研究している。文部科学省、総務省、警察庁等で、子どもとネット問題等の委員を歴任。学校心理士、ピア・サポート・コーディネーター、ウィーン大学客員研究員。

